

マハトマ・ガンディーと宗教

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ12「人間と宗教」。9月17日の第4回講演では、赤松明彦理事・副学長が「マハトマ・ガンディーと宗教」と題して、ヒンドゥー教徒であるインド建国の父マハトマ・ガンディーが、宗教をどう捉えていたのかを語った。

●ガンディーは宗教的実現家



講演する赤松理事。「ガンディーの活動はどのような思想に基づいていたのか、著書や手紙に記された言葉とともに見ていきましょう」

ガンディーについて論じた本だが、その中でガンディーのことを「宗教的実現家」と呼ぶ。宗教的な面において、自分が信じることを必ず実践して実現しようとする、という意味だ。

また、「ガンディーは自信家でもあった」と赤松理事。自分の考えが他の人々の考えと一致することを疑わず、そして、思索したことを政治の中で生かそうと努力した人であった。

●学生期を終えるまで

ガンディーの人生の第一期は、学生期を終えるまで（1869～1891年）。ロンドンに留学して法律を学び、弁護士免許を取得してインドに帰国するまでの間である。

ガンディーが生まれた1869年は、イギリスによるインド統治が始まって10年以上が過

きた頃。「留学の際も、イギリスの一地域であるインドから首都に行くぐらいの気持ちで、自分がインド人であることを十分に意識していなかったはず」と赤松理事は分析する。

しかし、留学中にガンディーは“インドに出会う”のだという。その意味は、さまざまな経験を通して、自分にとってインドやヒンドゥー教がどういう意味を持つのかを考えるようになった、ということ。

例えば、それまで手に取ったことがなかったヒンドゥー教の聖典を読んだ経験。あるいは、「肉を口にしようとした」経験もそうだろう。「肉を食べるか食べないかという局面に立って初めて、自分がヒンドゥー教の伝統の中に生きている、ということを強く感じたはずです」

しかし結局、肉を食べないことを選択する。「これは重要な点。仮に肉を食べておいしいと思ったとしたら、その後のガンディーは違った人生を歩んでいたはずです」

なぜなら、ガンディーが最も重要なものと位置づける「非暴力（アヒンサー）」は、「命あるものは殺さない」という思想に基づくものだからだ。一般的に、非暴力は暴力をふるわないという意味に理解されるが、インドの伝統の中では「命を奪わない」という理解であり、それが菜食主義や牛の崇拝につながっている。

●南アフリカでの活動家としての時代

人生の第二期は、南アフリカでの活動家としての時代（1893～1914年）である。

当時、イギリスの植民地であり、多くのインド人が使用人として働かされていた南アフリカにおいては、法廷弁護士として渡ったガンディーも、さまざまな屈辱的な扱いを受けることになる。列車から引きずり下ろされて殴られたこともあった。「これもまた、インド人であることのもう一つの側面だと知るわけです」

弁護士登録についても、ナタール（南アフリカ）の弁護士会から登録申請に反対されるという出来事もあった。そうした体験を経て、1895年からインド人の権利のための活動を開始することになる。そして1907年、アジア人登録法の成立に対して受動的抵抗運動を開始するが、これがガンディーの非暴力抵抗運動「サティヤーグラハ」の始まりだ。

ガンディーの非暴力抵抗活動に影響を与えた人物が2人いる。

1人は、市民的不服従（civil disobedience）を唱えた、米国の思想家であるヘンリー・デイビッド・ソロー。もう1人はトルストイだ。著書に描かれた非暴力やキリスト教的愛に感動したガンディーが手紙を書き、トルストイからの返事には、ガンディーの抵抗運動の

あり方に対する共感が書かれている。

●マハトマ（偉大な魂）の時代

いよいよ人生の第三期、インドにおける活動の時代だ。それを、赤松理事は「マハトマの時代」位置づけている。マハトマとは偉大な魂という意の敬称である。

インドにおいて、ガンディーはイギリス支配やさまざまな不正義に対し、非暴力的な形での抵抗活動を行っていく。

1918年には、紡績工場労働者のためのサティヤグラハを指導してストライキを実施。1919年には、ローラット法制定に対して、全インド的な抵抗運動を指導する。しかし、その中で虐殺事件が起こったことにより運動を停止。「あくまで抵抗運動は非暴力で行うという意思を貫いていくのです」

1930年、独立宣言が公表され、さらに独立運動が活発化していく。有名な「塩の行進」は、塩の専売に対して抗議したものだ。さらに、紡ぎ車の横に座った写真は有名だが、紡ぎ車が象徴するのは、インドの重要産業であった紡績がイギリスの大量生産によって荒廃したことに対する抵抗である。

●宗教をめぐるガンディーの言葉

「ガンディーの生涯と活動について見てきましたが、この後は、ガンディーの思想について、著書や手紙をたどって見ていきましょう」

まずは「宗教」について。インド人であるという自覚の中で、広い意味において宗教をどう考えたのか。

「他の宗教よりもヒンドゥー教を重んじてはいるが、それはヒンドゥー教のことではなく、ヒンドゥー教を越えるものとしての宗教のことである」とガンディーは述べているが、それはつまり、個別の制度化された宗教ではなく、本来的な宗教というものがあると考えていたわけだ。ただし重要なのは、ガンディーが宗教を政治活動とは別のものだと考えていなかったということ。政治はいわば行動であり、行動と宗教は一体化しているものだと考えていたのである。

また、次のような言葉もある。「真の完全な宗教は一つだけだが、解釈は数多くあり、その解釈についてすべての人が間違っていることはない。かくして、寛容の心が必要となる」

ガンディーは他の宗教に対しても、単に頭の中だけでなく、改宗に近い形で「それもま

た真理である」として理解しようとする。それが「寛容」という表現に結びつくのだろう。

寛容は無関心に結びつくと言われるが、ガンディーは「自分自身の宗教に無関心になれと言っているのではなく、もっと理解し、純粋な愛を持つようにと言っている。寛容は精神的な洞察力を与える。それは狂信から隔たったもの。宗教についての真の知識は、信仰と信仰の間にある障害物を取り除く」と述べる。

「これは非常に重要な言葉です。現代社会においても、本当に寛容ということはどういうことなのか、問い続ける必要があると思います」

●ヒンドゥー教と他の宗教について

ガンディーは自分がなぜヒンドゥー教徒なのかについて、次のように語っている。

「ヒンドゥー教は排他的な宗教ではない。他の信仰の内にあるよきものは賞賛し、それに同化するようにさせる。非暴力はすべての宗教に共通するものだが、それはヒンドゥー教において最高の表現と応用を見いだした」

また、「牛の崇拝は人道主義に貢献している」と考えていることも、ヒンドゥー教徒であることの理由だろう。「根底に生き物すべてに同じ価値を持った魂があり、人間と同じように扱うべきだという観念がある。それが不殺生に結びついていることが、ガンディーにとっては重要だったはずです」

では、他の宗教についてはどう考えていたのか。

まずキリスト教だが、イエスのことを世界的な指導者であり、当時においては神に最も近い存在であったとして、重要な存在と考えている。

仏教は涅槃や無我という思想をとって、否定的なものとして捉えられることがある。しかし、ガンディーは「涅槃は我々の内にある利己的なもの、邪悪なもの、墮落したものの完全な消失である。涅槃は魂の平安であり、幸福である」と、肯定的に理解する。

イスラム教についても、ガンディーは「平和の宗教であるという点では変わらない」と言うが、彼自身、最も苦勞したのがイスラム教との関係であった。ヒンドゥー教とイスラム教を融和しようとしたことで、狂信的なヒンドゥー教徒に暗殺されてしまう。

●真理と神、愛、そして非暴力

ガンディーの考えを特徴づける非暴力は、真理、神、愛が結びついて生まれてきたものだ。それらの思索について、「真理は神であり、真理への到達の方法は愛を通じてである。愛はすなわち非暴力である」「真理は非暴力の同義語であり、非暴力を通してのみ、真理に到達できる」という言葉が残されている。

さらに最晩年には、次のように述べる。「非暴力は目的ではなく、真理が目的である。非暴力の実践を通じてしか人間関係の中で真理を実現する方法はない。非暴力を遂行すれば必ず真理に到達する。暴力によったのではそうはならない」

「理屈では、暴力によって暴力を断ち切ることはできないと分かっているけれども、実際、非暴力によって暴力に立ち向かうことは簡単ではありません。しかしガンディーは、自分の考える宗教に基づき、最後まで非暴力を実践したのです」

赤松理事はガンディーと宗教についてこう評し、講演は終了した。



「ガンディーが、ヒンドゥー教はキリスト教や仏教とはここが違う、と考えていたことは何でしょうか」という質問に対し、「やはり非暴力でしょう。ガンディー自身が言うように、非暴力がヒンドゥー教において最も強力に出てきたから。彼の非暴力抵抗活動は、ヒンドゥー教徒であることによって支えられていたのだと思います」と赤松理事は答えた